

ARTA

AUTOBACS RACING TEAM AGURI

Project

「新たな出発への挑戦」

2017 ARTA DIGITAL Rd.8 TWINRING MOTEGI

NO CHALLENGE, NO LIFE

長かった2017年のシーズンも、いよいよ最後のレースを迎えた。
タイでの戦いを終えて11月2日にファクトリーへ戻ってきた
ARTAのマシンたちは、クルーたちの手によって大急ぎで整備と
セットアップが施され、ツインリンクもてぎへと運び込まれた。
最終戦では全てのウェイトハンディは降ろされ、全車が本来の速
さで勝負する。

つまり、マシンとチームの真価が問われるということだ。



AUTOBACS

今季 GT500 クラスで3度もポールポジションを獲得している8号車 ARTA NSX-GT には大きな期待が寄せられたが、セッティングが上手く決まらずに予選では12位と低迷してしまった。しかし GT300 クラスを戦う55号車 ARTA BMW M6 GT3 は予選2位を獲得し、惜しくもタイトルは逃したものの実力を証明してみせた。





いよいよ最終戦。

エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市がスタートドライバーの高木真一にアドバイスを送る。

土屋「右タイヤ、右の2本はしっかり熱を入れてね。集中して、勝負かけるよ！」

高木「はい～、頑張りますよ～！」

55号車はスタートで2位をキープしたままレースを進めた。



野尻智紀が乗った8号車もポジションを守り、6周目には10位に上がった。

野尻「後ろを思いっきりぶつけられた！」

GT300クラスのマシンに引っかけたところで後続車に追突されるアクシデント。マシンのダメージが懸念されたが、エンジニアの星学文がストレートを走るマシンを目視で確認して無事を伝えた。

星「今ストレートで見たけど、(ダメージは)ディフューザーのフィンかな。

そのくらいなら大丈夫だから、このままいこう」






翌周には 8 位にポジションを上げた野尻だが、タイヤのグリップ低下が進んでステアリングと格闘しながらのドライビングだった。星「タイヤはどう？ まだまだ保ちそう？」野尻「余裕はない！ フロントもリアも結構ツライけど頑張る！」野尻は 21 周目まで耐えてピットに飛び込み、小林崇志に今シーズン最後のステントを託した。





SHOWA



一方、2番手を走行する55号車の高木は、タイヤのグリップ低下を感じ取りながらも丁寧なドライビングでタイヤを守り、無交換作戦に勝機を見出そうとしていた。

高木「結構リアがタレてきたね……。

ちょっと抑えて走らなきゃいけないと思う。クルマのバランスは今までの中では一番良いけど、やっぱりリアがちょっと弱いね……

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project

ライバルのペース低下を目の当たりにしながら走り、16周目にはトップの4号車がピットインしたことで首位に躍り出た。彼らが4輪交換したことで、無交換作戦による逆転のチャンスはさらに大きくなった。

エンジニアの安藤博之からそれを聞かされた高木は大喜びだった。

高木「今度は初音ミク（4号車）が入ったね。急にペースが遅くなったもんね。タイヤ交換してる？」

安藤「4号車は4輪交換です」

高木「やったじゃん、チャンスあるよ、これ！」

安藤「はい、チャンスありますよ。後ろの25号車はギャップ4秒。33号車が2輪交換で4号車の前。25号車も2輪交換です」



前がクリアになったところで自分たちのペースを確認し、高木は無交換で最後まで走り切ることが可能だろうと判断した。

それを可能にするために、次のスティントを担当するショーン・ウォーキンショーにもドライビングの仕方をアドバイスすることも忘れなかった。

安藤「ラップタイム 51 秒台をキープできるなら無交換でいきたいですね」

高木「いけると思う。絶対いける。あと何周？」

安藤「あと 6 周」




ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project

高木「ショーに、しっかりタテで止めろって伝えて。リアの横（方向のグリップ）はないからね。フロントは使っちゃって良いよ」

31周目にピットインし、タイヤ無交換でコースに戻った55号車は狙い通りトップで戦列に復帰した。

55号車のステアリングを握ったウォーキンショーには、タイヤマネジメントを成功させるために安藤からの確かな指示が伝えられた。





安藤「残りは19周。リアタイヤをマネジメントしてくれ。
2位とのギャップは15秒」

SW「了解」

そこからは残り周回数と2位とのギャップが毎ラップのように
伝えられる。そのギャップは刻々と縮まっていく。こちらは使
い古したタイヤ、あちらは交換したばかりのタイヤなのだから
当然のこととはいえ、苦しい展開に追い込まれた。

野尻から8号車のコクピットを引き継いだ小林は、気を引き締めて走り出しから猛烈にプッシュしていた。星「良いよ、アウトラップ速かったよ。このままプッシュしていこう、プッシュ。ここから数周はマックスでプッシュだからね」



小林「了解！」

星「前の2台を抜いていこう。12号車、1号車ね。17号車は41秒8。

100号車は40秒7。

もうちょっとペースを上げていこう」

小林は13位でコースに戻ったが、ひとつずつポジションを上げて35周目には9番手まで浮上してきた。

星「小林、良いペースだよ、このままいこう。ポジション9、後ろのマシンはもう随分後ろだよ。

前の1号車を抜いていこう」

小林「残り周回数は？」

星「残り13周」




最後まで攻めた。しかしそれ以上に順位を上げることはできないまま、
チェッカーダフラッグが振られ時間は尽きた。

星「お疲れ様でした、ポジション9です」

小林「了解です、ありがとうございました」





一方、55号車にとっては、逆に残り周回数が長すぎた。残り3周、2位の65号車が背後に迫り、次のストレートで為す術なく抜き去られ首位を奪われてしまった。しかしそれは勝利を狙い攻めたがゆえの結果。

チームの誰もが納得の上の2位だった。

安藤「ポジション2、グッジョブ」

土屋「みんな、良い仕事をしたな！ ショーン、グッジョブ！」

SW「みんなゴメン、もうタイヤのグリップが残ってなかったんだ。リアタイヤがもう終わってしまっていた……」

安藤「君は良いマネジメントをしたよ」



ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project



PORSCHE

BRIDGES

YOKO

Mercedes-Benz

SUBARU

zf.com/jp

CREATIVE Super AUTOBACS CARLIFE STORE

Fireflex

AUTOBACS

Holts

Castrol

EDGE

PROSTAFF

PITPRO

Coca-Cola

CORTEC

S.WALKINSHAW RACING

Aral

NGK SPARK PLUGS

ARTA Project

SS



BRIDGESTON

YOKOHAMA 100



zf.co

Firefix

ARTA Project



OBACS

POTENZA

ARTA Project

SMITH

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project

こうして ARTA の 2017 年シーズンは幕を閉じた。
頂点に立つことはできなかった。
輝かしい結果は付いてこなかった。
しかし、頂点を目指すためにこれまでのどのシーズンよりも攻め、
どのシーズンとも違った手応えを得た。
ここから ARTA は新たなシーズンへと向かう。
この経験があるからこそより大きく成長し飛躍できる、そう信じて。






AUTOBACS AUTOBACS

AUTOBACS AUTOBACS

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project



ポールポジションを獲る速さはあれど、結果に結びつかなかっら開幕戦。
そして5月の富士では奇跡のダブルポール・トゥ・ウィンを成し遂げたりと、
まさに波乱万丈の2017年シーズンでした。
最終的にチャンピオンシップには両クラスとも手が届きませんでした、
来季への手応えをしっかりと掴んだ一年だったと言えるでしょう。
来たる2018年、ARTAはさらなる飛躍を遂げることでしょう。
一年間ご愛読ありがとうございました。





25

8

ARTA NSX-GT

Mobil 1

COMTEC
PITPRO

Mobil 1

BRIDGESTONE

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project

AUTOBACS

AUTOBACS

55



Project

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project

ARTA
AUTOBACS RACING TEAM AGURI
Project





株式会社オートバックスセブン



ARTA Project



ARTA DIGITAL
You tube チャンネル

To Be continued next race...

ZERO
BORDER
Team ZEROBORDER

©2017 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD